

教育実習で小津中学校に行けたことで、想像していたよりも良い実習になりました。というのも、研究開発学校になっていて他の学校では学ぶことが出来ないことを、たくさん学べたからです。「学校のコンパス」「共創」「チーム担任制」といった独自のことを、体験でき実感することが出来ました。生徒主体の教育ということが大事ということは、頭で分かっているけど、どこまで教師が介入するのかなど分からない状態でした。しかし、実習で生徒主体の教育体制がどのようなものかを肌で感じる事が出来ました。実際、先生は助言や注意事項を伝えるだけで、ほとんどが生徒の手によって進められる状態でした。そのため、やる気のある生徒にとっては大変やりがいのある活動になるのに対して、やる気のない生徒は退屈になってしまっていました。こういった生徒に対しても向き合っていたのが印象的でした。全員を見るということは大変なので、どうしても

授業関連でも多くの学びがありました。始めの方は見学をしていましたが、生徒を見る場所を指摘されました。生徒の後ろや横から見たり話したりしていましたが、視線を合わせて話す方が生徒の警戒心も解けると教わり、それ以降は生徒もよく話してくれるようになったような気がします。チーム担任制ということもあり、全クラス HR で行っていたので授業は比較的しやすかったかなと思います。他学年の数学の授業を見学していて、文字式や方程式などの単元では特に、単元の繋がりを意識し、授業づくりをすることが大切だと学びました。それを意識して、教材研究・授業準備をしていくとあれもこれもとなることがありました。ひとつの授業で考えるのではなく、その単元全体を通して何を教えるのかを始めに決めることが大事だなと思いました。授業をスムーズに進めていくための方法として、机間巡視のときに当てる生徒・班を決めておいて、声をかけておくということがあったと学びました。実際、研究授業と同じ授業を他のクラスでしたときは、そこで上手くいかなかったことがあったので、予め声をかけておくなどの工夫が授業をするうえで必要だと思いました。また、演習問題を解く時間では苦手な生徒に教えながら一緒に解き、その問題を当てることで出来るという達成感を与えることが出来、次の授業のときにはその生徒が手を挙げて答えてくれるということがありました。生徒とのコミュニケーションは、授業以外の部分が大きいように思っていたんですが、授業でも大きな影響があるんだなと感じました。道徳の授業の発問では、答えを求めるような聞き方はしてはいけないと学びました。「なぜ？」という質問をしてしまうと答えを考えるのではなく教科書から探してしまうので、「このときどんな気持ちだっただろう？」というような聞き方をしなければいけないと学びました。また、教材が長いものを扱うときは、生徒の集中力があまり続かないので、途中で問いをいれるなどの工夫によって、生徒が考えることが出来る授業をしなければいけないと学びました。